

アルパック ニュースレター

迎 春

平成 8 年元旦



大阪城公園で凧あげをする子どもたち (本文中に関連記事があります)

アルパック ニュースレター もくじ

1996年1月1日

- あけましておめでとうございます…………… 2
- 関西文化学術研究都市への道程…………… 5
- 商業施設開発の今後の方向性…………… 7
- 英国のグラウンドワーク活動を視察して…………… 9
- ジョモケニヤッタ農工大学に赴任しました…………… 11
- 気がつくと思い出していた「創る」感覚…………… 13
- 「緊張と緩和—日本文化の源流を探る—」…………… 14
- 新刊旧刊書評紹介…………… 15
- まちかど…………… 16

NO. 75

あけましておめでとうございます。

創立30年のダイナミズム

代表取締役会長 三輪 泰司

昨年、激動の時代、劇的な変化を予感していましたが、年初から予想を越える事件が続発。変曲点通過の過程はまだ続いています。

ダイナミックな世界的変化の中で、創立30周年を迎えるのは、愉快的ことです。

国際的スケールでの対話

猛烈な情報化のエネルギーの中で、行動の座標軸を確かめるために、対話に精力を注いでおります。全く違う立場や専門の方々との対話、殊に外国の方々との対話はとても楽しく、反省の良い機会を与えて頂けます。

今年度、京都東ロータリークラブでは創立40周年の年の会長を仰せつかり、昨秋、記念事業の一環として、京都コンサートホールのオープニングに出演した国立パリア管弦楽団の皆さんを、鹿ヶ谷の法然院で、お茶・お華・お琴に雅楽と日本文化の粋をもってお招きしました。核実験強行と重なり、少々心配しましたが、文化は互いに刺激しあって磨かれ、平和は理解と友情によって得られることを実感しました。そして団員の立派なマナーとクラブ会員の献身的なご奉仕に感動致しました。新しい世紀を拓く

APEC関連・アジア太平洋シンクタンク会議 95 の対話から、大変曲点を越えて行く強力な国際的ネットワークも拡がりました。

アルパックは、委託者のご批判と協働の中で育てて頂きました。おかげをもって遅しい次世代が育ち、変革・刷新を実行して行くことと確信しております。どうか尚一層の厳しいご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

地域振興を図る方程式の解を探る

代表取締役社長 金井 萬造

昨今の厳しい情勢の中、皆様のご指導に対し、お礼申し上げます。

去年は地域の未来を担うであろう非営利組織（NPO）の役割を勉強したいと宣言しておりましたが、阪神・淡路大震災でのボランティアの活動と高齢社会の進行で一気に今日的な課題となりました。

本年はNPOの活動と共に、6年前から取り組みはじめている農村や中山間地域、地方都市における「ふるさとづくり運動」について展望を見出していきたいと願っています。

地域の元気を促進するには、人づくり、地域づくりのノウハウの蓄積を活かし、地域資源の発掘活動を図ることが必要です。その過程で、地域の身の丈に合った技術を新しい視点でフレッシュアップすることが大切です。その元気を図る方程式がおぼろげながら明らかになってきています。本年はさらに事例や実践を積み重ねて進展させたいと考えています。

地域の振興について、事業化に伴うリスク対応のさらなる検討と行政、企業、地域住民の新たな役割のあり方としてNPO活動の具体的イメージ、推進組織のあり方や運営における事務局の役割等を明らかにしていきたいという大きな夢をいただいています。

地域の産業空洞化と高齢化という社会背景の中で、弊社も地域の方々と共に悩みながら未来に向けて一線の光を見つけ出していきたいと念じています。それには多くの方々のご助言とご援助、連携が必要です。今年もよろしく願いいたします。

京都の文化経済システムで明日を展望

京都事務所長 山口 繁雄

昨年度は経済のグローバル化により産業の空洞化が一層進展しました。バブル経済の後始末もなかなか思うに任せず、苦闘の連続の感があります。そうした中で起こった阪神大震災、そしてオウム事件。都市計画や建築設計に携わる私どもにとっても根本的なところでスタンスを問われた1年だったように思います。

時あたかも戦後50年、明治維新以来進めてきた接ぎ木的な洋風文化の導入による「近代化」は、確かに経済的な発展をもたらしたと思えますが、ここに来て先行き不透明という状況をつくり出しているように思います。

「科学技術立国」が今後の国策の柱になるということのようですが、創造的に将来を切り開いてことが求められる時代だと思えます。

さて、私どもが携わる都市計画や建築設計の分野においても、多様化し高度化したといわれる人々のニーズにあった都市や建築のあり方を、「近代化」の足跡を踏まえて創造的に追求していくことが求められています。

なかなか大変な課題ではありますが、この課題の克服には、「京都」が大きなヒントを与えてくれるように感じています。つまり、創造的というものは、それぞれの地域に蓄積されてきた文化から生み出されてくるのではないかと考えると、京都はまさに宝庫に思えてきて、いよいよ「京都の時代」は近いぞという感じがするのです。

厳しい状況が続くものと思えますが、そうした思いを秘めて所員一同頑張ります。引き続き御指導、御支援をお願い致します。

1996年を「創造」の年に

大阪事務所長 杉原 五郎

学研都市とベイエリアの仕事をしています。学研都市では、(財)国際高等研究所や(株)けいはんななどを活用して、高度な学術研究と新産業創出の拠点をどのように創造していくのかなどに頭を悩ましています。ベイエリアでは、環境保全・創造の具体的な整備のあり方を調査研究しています。

私たちは、何げなく「創造」という言葉を使っています。学術研究の創造とか環境の創造といった具合に。しかし、言葉だけが先行して、中身が伴っていない場合が多いと思います。いったい、どうすれば「創造」は可能なのでしょうか。私は以下のように考えます。

第1に、創造とは、まず頑固であること。こだわりといってもよい。夢(ロマン)を持ちつづけることです。大リーグへの夢を抱きつづけて見事に実現した野茂を見習いたい。

第2に、創造とは、現実を直視すること。コンサルタントとして21年間地域を追いかけてきて、つくづく実感している。机の上だけの議論は迫力がない。生きた情報は、現場にある。先般、広島県の五日市に整備された人工干潟を調査する機会があり、干潟に飛来するシギやカモをみて感動した。

第3に、創造とは、自由に心がふれあうこと。囲碁をしていると、〈定石〉というものにこだわりがちになるが、そうすると石の運びがぎこちなくなる。人間は、どうしても組織や前例にしばられやすい。精神を自由な大空に解放し、人々のふれあいの場をつくることが重要ではないか。

1996年が真に創造の年となるよう、大阪事務所をあげて奮闘したいと念じています。

あけましておめでとうございます。

新しい時代潮流の創造に向けて

名古屋事務所長 尾関 利勝

1995年は戦後50年を数え、時代の転換とともに、来るべき時代と社会への問題意識を考える年でもありました。業務をはじめ、私どもに貴重な機会と場面を提供頂きました皆様方に、心からお礼を申し上げます。改めて、本年も旧来に変わらぬご指導ご鞭撻を頂戴致しますよう、お願い申し上げます。

戦後50年の節とともに、人口と経済成長の関係から時代の転換点を百年のオーダーで捉え、現在を近代終焉の時期と認識しています。

かつて、江戸初期の百年間でおよそ人口は倍増し、以後明治に至る二百年間、日本の人口は三千万人台で推移し、その後明治に入り工業化と近代化の流れの中で、再び人口増加期に入り、今日まで右肩上がりの社会が続いて来ました。江戸の後期二百年の中で、人口増加の安定とともに、様々な社会規範としての文化が形成されています。

数年前、モデルの無い時代に突入したと申しておりましたが、社会経済システムの違いはあれ、四百年の歴史を振り返れば、成長から安定、そして社会システムと文化形成期の時期があったことが蘇って参ります。

かつて、まちづくりは10年先が読めず、せいぜい30年が限界と感じていましたが、地球と共存する持続する社会、即ち新たな社会規範としての文化形成を意図する時、百～五百年のタイムスパンで社会を考える事が必要と感じております。21世紀を間近にして正月早々、多少大風呂敷になりましたが、現実の場面では、今年もまた明日の事に追われ続けそうです。一層努力を続ける所存です。本年もよろしくお願い申し上げます。

今年は「仕入れ」も大切に

東京事務所長 小林 佑造

新宿御苑の前に引っ越してきた当時は富士山と夕焼けが西口の高層ビルの間を通して綺麗に見えていましたが、新宿駅南口のJR操作場跡に進出してきた高島屋の軍艦ビルによって見えなくなってしまいました。しかし、夕焼けだけは巨大な超高層ビルを真っ黒なシルエットにし見入ってしまうほど綺麗な茜色を見せてくれています。富士山が見えなくなったその代わりといっは何ですが、新宿御苑の新宿門が事務所の前に移ってきたことから、今まで気がつかなかった銀杏の黄色と紅葉の深紅が目にも痛いほどです。うらさびしかった事務所の前も、土日以外の天気の良い日には人波が絶えることなく、また空き室の多い新宿で我がビルは空き室待ちの状態になっていると大家さんがニコニコしています。インフラの整備がこれほど地域を変えてしまう事を毎日身を持って体験しています。

昨年、関西は阪神淡路大震災で大変でしたが東京事務所もボランティアとしてほんの少しお手伝いをさせていただきました。関東でも地下鉄サリン事件当日私も一台後の電車に乗り合わせており大変な思いをしましたし、所員の中には何週間か地下鉄を敬遠し大廻りしながら通勤していた人もおりました。

仕事の面では相手先も北から南と幅広くお付き合いいただき昨年は何かあわただしい一年でしたが、今年は「仕入れ」を中心に、サービス提供と業務遂行に役立てていきたいと考えております。本年も引き続き、ご指導ご支援のほどお願いします。

今年もよろしくお願ひ致します。

地域づくりの屋台村を目指します

九州事務所・(株)九州地域計画研究所
副所長 山田 龍雄

今年、九州地域計画研究所では、次のような行事や新しい試みを実施し、多くの方とのふれあいができたこと、あるいは叱咤激励を受けたことなどを報告し、年頭のあいさつとさせていただきます。

①昨年、我が社は「地域づくりの屋台村（多様な思い思いの特徴を活かして店を出し、それぞれの店がまとまって村をつくることによって、お客様の一層のサービスを提供する）」を目指すことを宣言しました。一人ひとりが特徴をもち、顧客をもつようになることを目指していきたいものだと思います。

②第3回「よかネットパーティ」（特産品、各自うまいもの持ち込み）を開催し、90人程の参加を頂きました。しかし、来場者の

割に場所が狭く、少し窮屈なパーティとなっていました。来年どうしようかと思案中であります。

③元気の良い高齢者を中心として、そのネットワーク化と活動を支援している(社)長寿社会文化協会(WAC)の下部組織である単位グループの九州支部を組織し、約30名の会員の方に参加していただいています。

④「何故、高齢者はふるさとから去っていったのか」というテーマで(財)総合研究開発機構(NIRA)の研究助成を受け、高齢者の移動について調査しております。内容については今年の4月以降にレポートになる予定です。

以上、思いつくままに昨年の思い出を綴りましたが、今年も所員一同、大いに好奇心を発揮し、チャレンジ精神で頑張りたいと思っております。

(九州地域計画研究所、所員一同)

関西文化学術研究都市への道程 ～アジア太平洋シンクタンク会議 '95～

三輪 泰司

1995年11月6～7日、APEC大阪会議の機会に、関西文化学術研究都市の「けいはんなプラザ」を会場に、アジア・太平洋9ヶ国のシンクタンクが集いました。先ずもって、ご支援を頂きました京都府と(財)総合研究開発機構、準備・運営にご尽力を頂きました(財)関西情報センターと地方シンクタンク協議会事務局の皆さんに、厚くお礼申し上げます。健全な市民による都市づくり

会議は、荒巻禎一・京都府知事の特別講演、星野進保・(財)総合研究開発機構理事長の基調講演に続き、アメリカ、韓国、中国、オーストラリア、カナダ、マレーシア、インドネ

シア、タイ及び日本のシンクタンクからのプレゼンテーションと、アメリカのシンクタンクThe Urban Instituteの上野真城子研究員の特別報告。しめくりに、小森星児・兵庫県立姫路短期大学学長のコーディネートで、宗田好史・京都府立大学助教授等パネリストに、プレゼンターも加わりパネルディスカッションを行い、最後に会議アピールを採択して、2日間の日程を終えました。

僭越ながら、私が日本を代表して「日本におけるシンクタンクの生成と活動—学研都市への道程とそのコンセプト」と題して報告しました。

シンクタンク生成史は、参加諸国への紹介を兼ねて、本題の関西文化学術研究都市の意義とそこでのシンクタンクの役割への前置きです。

星野理事長が基調講演で提起された「市民」による地域社会の諸問題解決へ、シンクタンクは如何なる理念をもって実践行動を組織して行くべきかを訴え、お互いの交流を継続し連帯と協同を提起したかったのです。

プレゼンテーションの中では特に元ビクトリア市の市長であるカナダの David Turner ビクトリア大学教授による、市民合意によるまちづくりの活動報告等や、元上海国際問題研究所研究員の朱建榮氏の率直で的確な中国での活動報告などが感動的でした。成果を固め、拡げるために

まだ、私達は、APEC大阪会議の全般について、評価したりする立場にはありませんが、関西文化学術研究都市の構想と、その推進過程でのシンクタンクの果たした役割は、日本にとって第三の開国ともいえる現代の課

題に、何をもって国際社会に参加して行くかを示唆するものと思います。

APECが「地域協力」という抽象的な理念から、一歩具体的な「貿易投資と開発協力」を掲げ、オーストラリアのエバンス外相の言う、3段重ねのウエディング・ケーキで言えば、下段の「広義の開発協力」での日本の役割を探ること、さらに21世紀へ向けてAPECの基本理念を共有するために、参考になると思います。

関西文化学術研究都市は、母なる地球上の全ての生き物との共生を願う人々の“愛”から生まれ、産・官・学のボランタリー精神に燃える協同の行動から育ったのです。

その精神が、第2ステージにおいて発展されることを願うものです。

会議のアブストラクトは既に作られていますが、次のためにパネラーが討議してまとめ、参加者のご賛同を得たアピールを付したいと思えます。

(代表取締役会長 みわ ひろし)

アジア太平洋シンクタンク会議 けいはんなアピール

1995年11月6日と7日、APEC大阪会議に先立ち、ここ関西文化学術研究都市で開催された国際会議「アジア太平洋シンクタンク会議'95」は、9カ国の代表と250人を越える参加者を得て、実り多い会議として終わることができた。

多様性に富むアジア太平洋地域は、世界経済の成長センターとしての役割が期待されており、そのためには国・地域を越えて持続的発展と相互の協調が提案されているが、同時に地域固有の課題を解決し、発展にむけての努力が必要である。

この度の国際会議のテーマを“地域開発とシンクタンクの役割”とした目的は、地域開発には身近な生活レベルにおける諸問題の解決が優先されるべきであり、そのためには地域に根差したシンクタンクが重要な役割を果たすことができるのではないかとことを問うことになった。この2日間の会議を通じて、会議に参画した全員はこれを再認識した。

また地域課題の解決にむけて努力してきたシンクタンクが一同に会し、その経験から得た教訓や知識を交換するオープンな交流の場を持ったことは、大いに意義深いことも認識した。

この度の会議は地域開発をテーマにシンクタンクの役割を討議したが、今後アジア太平洋地域が経済発展を遂げるには、質の高い開発を目指して産業・住宅・交通・環境・社会問題など地域課題の解決を重要視する必要があることを確認した。

このためには地域社会に立脚したシンクタンクが、グローバルな視点で考えることこそ必要であり、地域に根差したシンクタンクの持つ知恵を共有し、互いに活用することの重要性も確認できた。

この会議を機会に、地域社会が抱える様々な問題に対し、アジア太平洋のシンクタンクのネットワークが形成され、今後もお互いの交流を継続していくことを望むものである。いまこのネットワークとなる場が形成され、議論が継続されることを提唱する。我々はその場を通じてアジア太平洋地域の発展に積極的に取り組むこととしたい。

1995年11月7日

※上記けいはんなアピールのオリジナルには、英文版があります。

商業施設開発の今後の方向性

矢野 治

流通業界は今、激動期にある

流通業界にとって「激動期」という言葉は旧くて新しい言葉であり、十年以上前から絶えず「激動期」といわれ続け、些か食傷気味の感がしないでも無い。只、今回の場合は、その激動の振幅の大きさにおいて、又業態としての存立が問われかねないという質の面において、正真正銘の激動期といえる。色々な現象が挙げられようが典型的な兆候として次の三つを挙げておきたい。

1. 44カ月に亘る百貨店の売上げ前年割れにみられる消費不況
2. 業態としての存在理由を問われている百貨店の苦惱—果たして百貨店は生き残れるか
3. 情報革命による新業態出現の予感—インターネットによるバーチャルショッピング

極く簡単な経営数値を比較してみても、百貨店の経営の苦惱ぶりは極めて厳しく、且つて流通業の王者としての面影は何処にもなく正に業態としての存立さえ問われているのが現状である。流通業の収益力は基本的に<売上げ><粗利率><経費>の三つの要因の組合せにより定まる。売上げの右肩上がりの伸びが期待出来ない現今の状況では、如何にロスを押えて粗利率を確保し且つ経費を抑えるか、いい換えれば如何に経営の効率を高めるかに各社共必死に取り組んでいるのが現況である。各社が経営効率を高める為色々なテーマに取り組んでいるが大きくは次の五項目程度に絞られよう。

1. ローコスト体質化 開発コスト・運営コスト・特に人件費
2. 情報システムの構築 情報管理システム

としてのチェーンストアオペレーション・迅速、精度

3. 商品開発力の強化 よりキメ細かなマーケティング力・より精度の高い計画販売力
4. 業態開発競争 NSC¹⁾・GMS²⁾・RSSC³⁾・ポイントは複合化のコンセプト
5. 立地移動 駅前中心商店街から郊外へ、郊外から更に超郊外へ

百貨店では現在未だ経費のローコスト化、それも極めて初歩的レベルに於て全力で取り組んでいる状態であり、量販店各社よりみればかなりの遅れは否定出来ない。一部百貨店では情報システムの構築に取り組んでいるが全体として情報管理システムの遅れは致命的である。

注意すべきは上記各項目は並列的な関係ではない事である。最も基本的な基盤として情報管理システムがしっかり構築され、より精度の高い情報がより迅速に得られなければ精度の高い商品開発は出来ず、一層のローコスト化を進めて経営の効率化を図る事も出来ない。又業態開発について明確な戦略に基づくコンセプトの構築とそれを実現する実務力が無いと立地移動についていけない。精度の高いマーケティング情報と計画的に消化する販売力がなければ、商品開発といっても独り善がりのお祭りに終わってしまい結果として高い授業料を払う事となる。現在百貨店の一部商品（例えば紳士服）では派遣社員に頼り切ってきた為殆ど自主販売力を喪失しているといっても過言では無い。精度の高い情報システムが経営レベルでしっかり構築され実務面で威力を発揮している点ではイトーヨーカ堂

が群を抜いている。

又明確な戦略発想の基に業態開発路線をしっかり構築し、果敢に立地移動に挑戦している点ではジャスコが他社を数歩リードしている。

経営効率の向上を急ぐあまり、対応すべき順序の後先が逆になる様な事があれば後日高い授業料を払う事になり、今後は今迄以上に流通業各社が「現在只今何に重点的に取り組んでいるかそしてそれは次のステップの為どう役立つのか」について注意しておく必要がある。

商業施設開発の方向

以上の様な流通業界の現況の中から今後の商業施設開発の方向性としてどういった点に注目すべきであろうか。

その場合商業施設開発を行なう各社に共通する課題と各社が夫々他社と差別化しようとする課題とに分けて考えて置く必要がある。

- ・共通要素⇒便宜性・ローコスト・複合性・ファイナンス
- ・差別化要素⇒時間概念・価格政策・業態開発

上記の内、共通要素とは商業施設開発に関する基本的課題ともいうべきもので、百貨店であれ量販店であれ、この基本的課題に対してしっかりとした取り組みがされていないと如何に差別化に優れていても虚弱体質のSC(ショッピングセンター)が生まれる事になる。ファイナンスの仕組みの工夫を

主としてDV⁴⁾におけるファイナンスの問題であるが、以前は初期投資に相当する或いはそれ以上の保証金をテナントより預託を受ける事で事実上の資金調達が行われている事が一般的であったが、これからは保証金で初期投資をカバーする事は不可能と考える必要がある、特に複合化が進む程夫々異なった出店形態を前提とする業種、業態を組み合

わせるケースが想定される。そのSCの状況に対応したファイナンスの仕組みをどう開発するかが大変重要な課題となる。ファイナンスの仕組みの工夫が開発の成否の鍵となろう。

差別化のポイントは「業態開発のコンセプト」をどう構築するかにかかっているといえる。その際重要な選択肢として時間概念(時間消費か時間節約か)と価格政策(より安くか値頃感か)があり、更に商圈の広がり、想定来店客のライクスタイル等の要素から設定されたコンセプトの基に構築された業態開発能力が差別化を図るキメ手となろう。

そこで一つ重要な問題は現在の百貨店が今後展開されるSCの核店舗になり得るか、という事である。残念ながら現在の百貨店ではSCの核店舗としての最適規模、品揃え、運営体制、情報システムが如何にあるべきか模索中としかいえない。

既存商店街の空洞化

最後に立地移動の点であるが、これを単にローコスト開発の為とか、競合回避の立地指向の為とかで理解すべきでは無い。移動手段の変化、即ち人力畜力(宿場)から鉄道(駅前商店街)へ、更に自動車(郊外型SC)へと変化する結果としての必然と考えるべきである。

その際既存商店街の空洞化という問題をどう解決するかは開発担当者、都市計画担当者の今後の大きな課題として残る。残念乍ら目下の所はキメ手が無いのが実情といえる。

(前掲西洋ランドシステムズ代表取締役社長
やの おさむ)

昨年10月20日、アルバック大阪事務所金曜ゼミで、矢野治氏に講演をいただきました。そのときの要旨を中心に商業施設開発の今後について寄稿いただきました。

- 1) NSC : Neighborhood Shopping center 近隣型商業施設
- 2) GMS : General Merchandise Store 量販店
- 3) RSC : Regional Shopping center 広域型複合商業施設
- 4) DV : Developer及びDevelopment 開発事業者もしくは開発

英国のグラウンドワーク活動を視察して

原田 弘之

昨年の10月末から11月の初旬にかけて、既に初冬の雰囲気漂う英国にグラウンドワークの視察に行ってきました。日本でも昨年10月に日本グラウンドワーク協会が財団法人化され、グラウンドワーク推進のための体制づくりが整いつつあります。グラウンドワークについてはこれまでにたびたび紹介されていますが、ここでは筆者なりにグラウンドワークの概要と視察事例について報告したいと思います。

グラウンドワークとは

グラウンドワークとは、1980年代にイギリスの農村地域で始まった「パートナーシップによる、地域での実践的な環境改善運動」で、ナショナルトラスト活動が国家的な自然・歴史遺産の保護を目的としているのに対して、グラウンドワークは住民に身近な生活環境をよりよいものに改善することを目的としています。具体的には以下のような幅広い活動を展開しています。

- ① 一般的な環境改善
- ② レジャー・レクリエーション・観光の振興
- ③ 遊び場・コミュニティ施設の整備
- ④ 環境教育事業の実践
- ⑤ 歴史的遺産の保全
- ⑥ 都市近郊農業へのサポート
- ⑦ 雇用トレーニングの実施
- ⑧ コミュニティ・グループの組織あるいは支援
- ⑨ イベントおよびキャンペーンの組織・運営
- ⑩ 市民活動への資金助成
- ⑪ 調査・研究の実施

その4つのポイントは、①環境改善を目的とした地域を良くする活動、②ボランティアの参加を得て実際に汗を流す活動、③住民、企業、行政を含む多くの地域主体のパートナーシップによる活動推進（資金的、人的、物的）、④活動内容や地域の参加を企画できる、専門能力スタッフのいる組織の存在となっており、特に住民、企業、行政のパートナーシップについては、三角形のロゴマークが示すとおり重要な概念になっています。

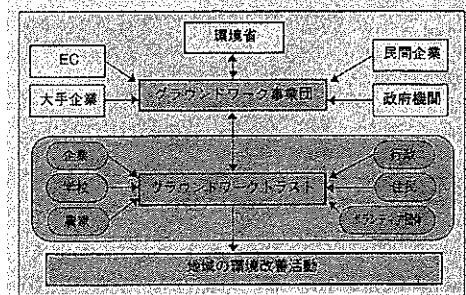
グラウンドワークのしくみは、国や大手企業などと資金等の交渉を行い、グラウンドワークの全国展開を進めるグラウンドワーク事業団と、現場で具体的な活動を行うグラウンドワーク・トラスト(GWT)からなっており、現在全国に32ヶ所のGWTがあります。GWTは政府と自治体との共同出資で設立される会社であり、チャリティー団体にも登録され



Action for the environment

グラウンドワークのロゴマーク

【英国グラウンドワークのしくみ】



出典：パンフレット

【英国グラウンドワークの現状】

(1993年末現在)

- トラスト数： 32 (95年までに50)
- 常勤スタッフ数： 約500
- 参加自治体数： 80
- 活動地域面積： 160万ha
- 活動対象人口： 950万人 (全人口の17%)
- ボランティア数： 4万人 (年間)
- 学校児童参加数： 10万人 (年間)
- プロジェクト数： 3000件 (年間)
- 年間収入総額： 2000万ポンド

ています。したがって税制上の優遇を受けるとともに、収入源のかなりの部分は国と自治体からの補助金によっています。しかし、自らの事業で収益を上げるにたがって、補助率は下がっていきます。

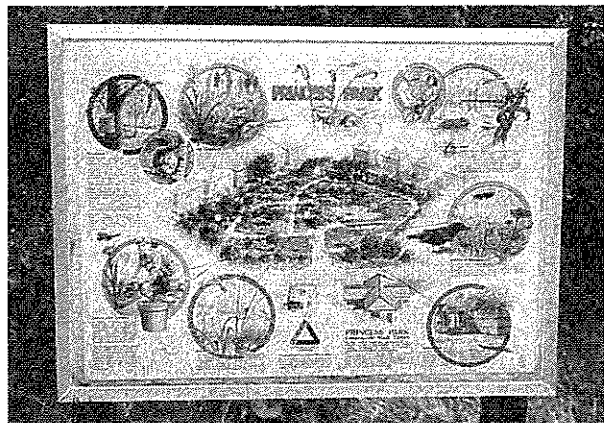
視察したグラウンドワークの具体例

視察団は北星学園大学の辻井達一先生を団長とする総勢39人の大所帯で、農村整備や自然保護関係の自治体の職員やコンサルタントがその大部分を占めていました。

視察のメニューとしては、グラウンドワーク事業団の本部（バーミンガム）の訪問、マンチェスター近郊の10ヶ所の事例視察、およびマンチェスター大学におけるグラウンドワークの講義等です。ここではその内の3つの事例について紹介します。

事例1：地域の自然学習公園の整備と環境教育

住宅地内の荒廃地を国と市、住民とGWTが協力して1,000㎡程度のナチュラルパークを



事例1：地域の自然学習公園の整備と環境教育

つくった事例です。湿地や地域のさまざまな植生が配置され、学習会などができるセンターもあります。失業者や障害者なども含む地域のボランティアがメンテナンスを行い、ネイチャーゲームや学校の先生のための自然教育プログラムも実施されているそうです。また地域の芸術家がコーディネートして住民と一緒につくった石像などもありました。まさに、地域や学校の自然学習センター的な機能を果たしていました。

事例2：中小企業内の敷地改善

車体組立工場内の元ごみ置場をビオトープに再整備した事例で、デザインのみGWTが無料で行い、整備は工場側が実施する工場内緑化プロジェクトの一つです。メンテナンスはGWTのアドバイスの下、工場が行っているそうです。将来的にはこれらの緑化された企業と周辺の学校をネットワークし、生徒が生き物の観察や緑地のデザインに加わる“グリーン・リンク・プロジェクト”が予定されています。なお、このプロジェクトは大手企業の費用負担となっています。

事例3：河川沿いの遊歩道とサイクリングロード

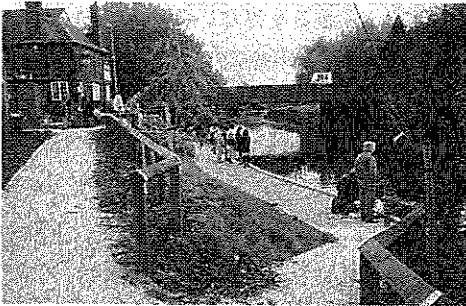
河川沿いに遊歩道とサイクリングロードをネットワークしていこうという事例ですが、その整備費用をネットワークに隣接するレス

トラン等が整備費用の一部を負担することがポイントです。例えば写真の<RED LION>というパブは整備費用10万ポンドの半分を負担しています。最後に

グラウンドワークによって整備された事例（モノ）だけを見ると、同じようなものは日本でも見られ、また行政のみの力によって整備可能であると思いがちです。しかし整備の



事例：2 中小企業内の敷地改善



事例：3 パブ RED LIONとプロムナード
過程を見ると、行政では直接手をつけるのが困難な民間の土地を対象としていたり、民間企業からの寄付や資材の提供を受けたり、あるいは住民ボランティアからの労力や知恵の提供もあります。また完成後の維持・管理も住民が行ったり、活用においても環境学習プログラムを組み込むなどしており、全体として一つのモノをつくる際のプロセスとその後のマネジメントを重視していることがわかります。この点は日本でも社会の全般的かつ

基本的な基盤整備がなされた段階においては、重要な考え方になってくると考えられます。

英国ではサッチャー政権以来、それまでの福祉国家路線から、できるだけ行政サービスを外部化・効率化して、行政の役割を縮小させる路線に変化してきました。そして産業の衰退をはじめとする都市や農村の問題も深刻化する中で、市民のボランティアの高揚も手伝って、グラウンドワークが生まれてきたと言われています。こうした状況があったにせよ、地域の問題を地域の構成員が中心になって解決していくという意味で、グラウンドワークというしくみは成熟した市民社会の一つのあり方だと考えられます。

逆にこうした動向から日本社会を見ると、現状の市民、行政、企業の関係や役割分担のあり方が問われてくると思います。日本でも既に静岡県三島市や滋賀県甲良町などでグラウンドワーク的な活動が展開され始めています。日本で英国と同様のしくみをもったグラウンドワークが適切かどうかは今後の検討課題ですが、少なくともグラウンドワークの精神をもった活動が展開されることを期待するとともに、筆者としても微力を注ぎたいと思っています。

(大阪事務所 はらだ ひろゆき)

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

ジョモケニヤツ農工大学に赴任しました

山田 克雄

山田克雄(京都事務所長補佐)は、現在“休職”の形で、JICA派遣の専門家として、ケニアのジョモケニヤツ農工大学の教官として、建築学科での教育と大学運営の任務を果たしています。なお、同大学は、日本の協力で設立されたプロジェクトで京都大学が教育と運営を支援しています。本原稿はケニアからの一報です。

暑かった夏も過ぎ、日本では過ごしやすい気候のこの頃です。7月の中旬に赴任してから、ちょうど3ヶ月が過ぎました。ようやく、車のクリアランスや長期滞在の諸手続きも終了して、なんとかこちらでの生活にも慣れてきたところです。

到着して間もなく、8月7日からこのプロジェクト評価を目的とするJICAミッション(中川博次団長)による会議と打ち合わせが始まり、14日からは予定どおり新学期が始まり、何かと慌ただしいスタートになりました

だが、一応こちらでの活動や受け持ち分担も決まり、大きな問題もなく学期の半ばを過ぎようとしています。しかしながら、既にお聞き及びのことと存じますが、現地の治安状況は悪く、町を歩きまわることがほとんど不可能なこともあり、足で歩いてその地域を知る現地主義もなかなか思うようにいきませんが、こちらで接する人々は大変ひとなつこく、また親切です。

赴任先のジョモケニヤッタ農工大学（JKUAT）に関しましては、ケニア政府による学費の値上げと奨学制度の変更により、他大学では学生の反対運動により学期が開かれていない状況がありますが、JKUATでは学費値上げ等が延期されたことにより本学は問題なく始まりました。しかし、来年度は授業料値上げ等の問題が先送りされていることから、予定どおり学期が始まるか、予断を許さない状況にあります。また、欧米諸国による援助の見直しや97年の大統領選挙に向けて社会経済情勢の悪化も考えられ、今後の不安材料を与えています。

建築学科におきましては、最初の入学生が来年度に最終学年を迎えることから、卒業研究・設計への対応が当面の大きな問題となっています。現在、私の受け持ちとして5年生の設計演習を担当していますので、来年度も引き続きこのクラスを担当し、卒業研究・設計をみていくことになると思います。学生は、なかなか優秀で、彼らの実習作品からみてもデザイン能力は優れたものを持っています。言葉や生活習慣の相違を除けば、中には日本の設計事務所や建設会社に入れても十分な能力を備えている者もいます。教員については、まだ十分にコミュニケーションが行えていませんが、収入面で十分なものがないことと、実務的経験が不足していることから、多くの

課題が残されているようです。ただ、設計演習の進め方には、欧米式のやり方で、学生の設計課題の提供等厳しいものがあります。

都市及び地域計画については、CPのマンガイ氏と協力して4年生を対象とするアーバンデザインの授業を受け持っています。授業内容についても、どうしても概論的・理論的になり、実学・専門的技術よりも一般教養的な内容にならざるを得ない側面があります。そのため、授業の一部に演習を盛り込み、今回はナイロビ市の地区デザインを演習課題とする予定ですが、現地のデータが皆無といった状況があり、スケッチデザイン演習にとどまるのではないかと考えています。学期が終了して時間的余裕ができれば、ナイロビ大学や関係機関を訪れ、現地情報の収集を進めたいと考えています。また、卒業研究・設計を進める中でもケニアにおける都市及び地域計画に関連した情報収集と整理を行い、ケニアの実情に則した教材作成ができればと考えています。

太陽が頭上の真上にきているランチタイムに教員食堂に向かう時、赤道直下のケニアに來ていることを実感します。気候は大変過ごしやすく、たのしく任期をまっとうできればと考えています。まだ、こちらでの滞在も浅く経験も少ない中で、なんとか学期の半ばを過ぎましたが、今後ともよろしくご助言、ご援助の程をお願いいたします。

1995年10月24日

（京都事務所 やまだ かつお）



気がつくと思いついて「創る」感覚

廣部 出

朝夕に吐く息がすっかり白く、そうして冬って奴は、あんなに暑かった夏の後でもちゃんとやって来るんだな…と思ったのは11月の半ば。霜の降りるクソ寒い朝っぱら(失礼!)から寝惚けながら、あれ?…秋ってあったっけ…。日々のドタバタにうっかり無くしていた季節感を、少しだけ取り戻したその日、実は私たちは所内旅行に出かけたのでした。早朝なのに案外にも集まりが良く、めでたく出発。呑む人は飲む、くっちゃべる人はくっちゃべる、寝る人は寝る、…and so on。

さて普段のお目覚めタイム。山あいを開けた田畑で朝日に溶けた霜が湯気とわきあがり、白い霧となつて無数のタヌキとお出迎え。

正解です。信楽(滋賀県信楽町)にやってきました。聖武天皇の時代に起源し、千二百有余年の歴史に培われた信楽焼。その歴史に…というよりは大小・扮装(?)さまざまに居並ぶタヌキ共に、さらには同じく居並ぶ小学生たちに圧倒されつつ、アルパック京都事務所の面々、いざ粘土遊び。

何かを「創る」ということは「はじめて～をなす」ということ。単純なことで、不思議と誰をも夢中にさせることなのに、これも日頃はつい忘れがちです。気がついたときには思いついている「創る」感覚にこちらニコリ、あちら真剣、みんな一生懸命。このとき思いおもいに作り上げた粘土細工、二月には日本一の登り窯で焼き上げられ、おそらくは日本一の茶碗や湯飲みとなつて、こねた人それぞれの手元に届きます。

ところで、上品に評しても「鯉に餌」、悪く例えりゃ「ハイエナに肉」(重ねて失礼!)

などという具合ではありましたが、私みたいな若造はそうそう毎日通えない、いわゆる老舗の料理旅館で鴨・ぼたん鍋にしゃぶしゃぶをいただきました。もちろん器も良く、三色の鍋物と気の利いた突き出しに一同ニンマリと舌鼓。この冬の鍋シーズン、この日が皮切りと相成りました。

…さて、命の水は甘露でございました。

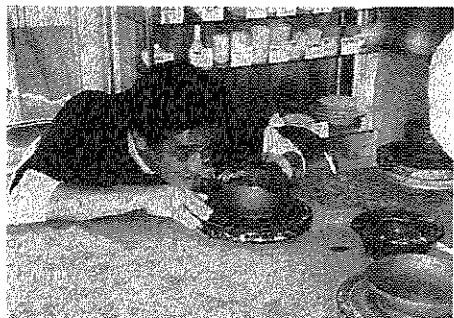
さて、最後はちびっ子万歳忍者村(甲賀の里忍術村:甲賀町)。創作活動(!)とご馳走と、五臓六腑に染み渡る件の命の水にてすっかり童心に還った、所長を首領とする忍者もどきの一団です。冬の初めの実にうら寂しい林の中に推参。登ったり降りたり、ぶら下がったりで、はしゃいでまわり、池を渡って手裏剣の稽古…。

そんなわけでこの一日、袋ごと頂戴した業務用忍術免許皆伝之巻にて無事、一巻の終わり。

(京都事務所 ひろべ いづる)



信楽のタヌキ



創作風景 (CG合成)

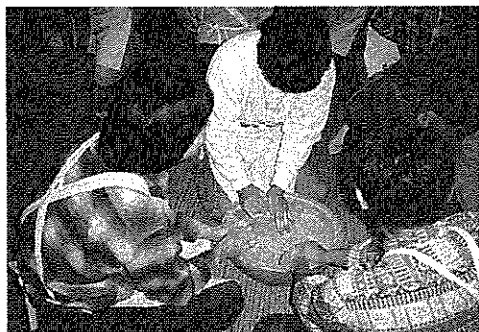
『緊張と緩和-日本文化の源流を探る-』

長谷川 めぐみ

一決して民俗学の論文の題名ではありません。昨年のお阪事務所の所内旅行のテーマなんですな、これ。しかしテーマのある所内旅行ってヨソの会社にもあるのかしら？とふと思う長谷川でした。

まあ、そんなことはさておき、報告に入ります。一日目のメインイベント！そば打ち体験。事務所を出てバスに乗ること約3時間、日頃の行いの良いせいか空は快晴で、順調に目的地の福井県今庄・そば道場へと着きました。ケヤキのこね鉢、ホウノ木の伸ばし棒、イチョウの切り板などを使いそば粉に山芋と水を混ぜ、こね合わせます。なかなか力のいる作業ですが、そばはコシが命。ここで手を抜く訳にはいきません。おばちゃんのOKがでたら今度は2mmの薄さまで伸ばし、それをやたら重くて大きい包丁で2~3mmの太さに切ります。中にはきし麺みたいなものもありましたが、味はバッチリ。美味しかったです。

…2日目。外はどしゃぶり。夜中突然の雷と共に降りだした雨。もしや誰かお天道様を怒らせるようなまねをしたのか！？うーむ修行の一つもすれば許されるかもしれない…。という訳で、今回の旅行のもうひとつの目玉、



ケヤキのこね鉢を使っのこね作業



緊張の座禅体験

永平寺（福井県）にやってきました。若い修行僧の方にお寺の中を案内してもらい（しかし一般客の多さに驚きました）いくつかの説明の後20分の座禅に挑戦！希望者は肩を叩かれましたが、後で聞いたところ、それ程痛くなかったそうです。私はというと20分ではとても無我の境地になれません。最後の5分は煩惱でいっぱいでした。

1時間程なんだか嘶家さんみたいな僧侶の方の有難いお話を拝聴し山を降りました。永平寺は周りの自然も素晴らしかったです、それより印象的だったのは、行きかう修行僧の肌が皆ツルツルできれいだった事です。もちろん頭も…ですが。

午後は芝政（声原町）で昼食。しかし座禅の後に殺生もとい四足のものを食べるなんて何だかな、と思ったのは私だけらしく皆モクモク食べてました。「日本文化の源流を探る」はどうなったんでしょう？

ところで私が一番緊張したのは1日目のバスの中でした。ああ酔わなくてよかった。

（大阪事務所 はせがわ めぐみ）



カとコツがいる伸ばし作業

新刊旧刊書評紹介

中田 武仁 著

朝日新聞社

『息子への手紙』

紹介 田中 一衛

1995年は、阪神大震災やその他の社会的大事件が数多く起った年でした。そのせいか、1993年4月8日に起きた、この国連カンボジア暫定行政機構（UNTAC）の選挙監視員である日本人ボランティア殺害という事件は、2年半程前の出来事にもかかわらず、かなり昔のことに感じられます。

本書は、故中田厚仁さんの父武仁氏が、我が子を見つめてきた25年の歳月を綴ったものです。黄色い地に黒のピンドット模様のネクタイを、息子の無事帰還を祈って毎日締め続けたという、息子への深い愛情と尊敬の念が、全編にわたって貫かれています。そのネクタイは、事件前年の、息子がカンボジアへ旅立った7月7日に数本購入したものでした。

内容は、大きく次の3つから構成されています。1つめは、息子である厚仁さんとの25年間、誕生から子育て、ポーランドでの生活、アメリカ留学、就職活動、国連ボランティア、カンボジアと、いろいろなエピソードを織り交ぜながら描かれています。2つめは、著者が亡き息子の遺志を継ぎ、会社（貿易商社）を退社後、「中田厚仁記念基金」を設立するなど、その後の活動内容を中心としたインタビュー記事です。そして、最後の3つめは、「阪神大震災とボランティア」です。震災後のボランティア活動を契機として、社会全体で、ボランティア活動を支援する体制の必要性が指摘されています。例えば、企業のボランティア休暇の推進、活動中の負傷・死亡にかかる保険や、長期化する活動を支援する義援金の募集、それを生かした基金など、バックアップ体制の充実を訴えています。

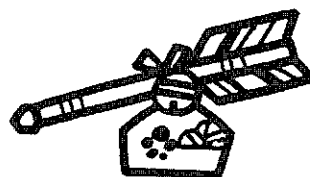


ボランティアとは

「ボランティア」という概念が、日本では今一つ浸透していないと感じる理由として、それを支える3つの大切なポイント、「自主性」、「非報酬性」、「福祉の心」が、私たちの社会には希薄だからではないかと著者はいっています。また、日本ではこれまで、「ボランティア」というと、奇抜な人がする、と揶揄するようなイメージがありますが、本来の意味は「ボランティア＝自主・自立で、自分で判断し、責任を持つという、あらゆる人に求められる資質である」ともいっています。

ボランティアとは何かということが主題にはなっていますが、それ以外にも、家族、子育て、教育、仕事など、いろいろなテーマが含まれています。著者の真摯でひたむきな姿勢から、一人の父、人間としての生き方に深い感銘を受ける書です。

（名古屋事務所 たなか いちえい）



まちかど

APEC大阪会議騒動記

中村 孝子

周辺の木々が色づきはじめ、普段なら遠足や家族連れが行き交う大阪城公園やOBPが物々しい戒厳体制に入り、例年とはひと味違う紅葉シーズンの幕開けとなった。

それは、95年11月に開催されたAPEC大阪会議の出来事である。非公式首脳会議が大阪城西の丸の「大阪迎賓館」、閣僚会議が大阪事務所の向かいのビルであるホテルニューオータニで行われることもあり、弊社のビルには早くから外務省の準備室や機動隊の仮眠室が入るなど着々と準備が進められていた。

今回の会議の成功が、将来大阪でのサミッ



道路の検問風景

トやオリンピックの誘致にかかっていることもあり、周辺では一週間前から植え込みの不審物チェックやマンホールの封印、道路の検問が行われた。会社に到着するまでに身分書の掲示や持ち物検査が行われたり、お昼時に道に並ぶお弁当屋さんがなくなったりで、連日の厳しい警備には少々うんざりしていた。しかし、昼夜問わず息も凍る寒さの中で警備にあたる警察官等の方々には頭が下がった。

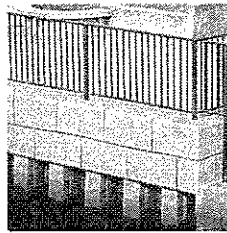
一方、OBPでは歓迎の意を表してビルの玄関先を菊花で飾ったり、歓迎フラッグがはためいたり、また例年より早くイルミネーションが点灯されたりとまちなみは鮮やかに変身していった。

さて、会議は無事終了し、大阪城公園はようやくいつもの顔を取り戻した。紅葉も終わりに近づいた西の丸庭園は、一般公開され訪れる人の目を楽しませている。警備による緊張もやっととけ、案外一番ほっとしているのは、大阪城かもしれない。

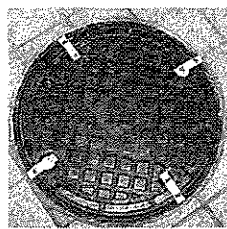
(大阪事務所 なかむら たかこ)



例年より早くカラ・ツイン21に設置されたツイン



写真上：APECにあわせてイソップされた石積み風コンクリート護岸
写真下：封印されたマンホール



アルパック (株)地域計画建築研究所

- 本社
- 京都事務所 〒600京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075) 221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06) 942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460名古屋市中区丸の内3-18-30・ツボウチビル2F/TEL(052)962-1224 FAX(052)962-1225
- 東京事務所 〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- ㈱九州地域計画研究所 〒810福岡市中央区天神1-15-1・日之出ビル6F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673